

七夕用語「梶の葉」の王朝文学における成立と、 その後の流布と継承

勝 俣 隆

はじめに

梶葉 ○ 七夕乃哥 楳つみて祈 と渡ル舟

これは、寛文九年（一六九九）跋の『便船集』（佗心子「高瀬」梅盛撰）の一節である。「梶葉」の付合語として、「七夕乃哥」が筆頭にあげられているのは、近世初期の俳諧連歌の世界において、「梶の葉」と「七夕の歌」さらには「七夕」そのものが、深い連想関係を持ち、分ち難く結び付いていたことを示すものと言えよう。

近世後期になっても、与謝蕪村（享保元年（一七一六）〜天明三年（一七八三））の

梶の葉を朗詠集の葉かな 「蕪村句集」

や小林一茶（宝暦十三年（一七六三）〜文政十年（一八二七））の

梶の葉の歌をしやぶりて這ふ子かな 「七番日記」
など、梶の葉は七夕の素材として読み継がれていく。

それは、散文の世界においても、同様で、例えば、西鶴『好色五人女』（貞享三年（一六八六））巻二・一「恋に泣輪の井戸替」には、

折ふしは秋のはじめの七日、織女に借小袖とて、いまだ仕立てより一度もめしもせぬを、色々七つ、雌鳥羽にかさね、梶の葉にありふれたる歌をあそばし、祭り給へば、下々もそれぞれに唐瓜・枝柿飾る事のをかし。

とあって、七夕に小袖を貸す習慣と共に梶の葉に歌を詠むことが、一般化していたことが窺える。

以上は、近世までの例だが、梶の葉は現代でも、たとえば、俳句の世界等では、季語の一つとして、その位置を占めている。

『大きな活字のホトトギス新歳時記(第三版)』では、梶の葉について、次のように説明し、例句を五句挙げて^(注1)いる。

古来、七夕には七枚の梶の葉に、星に手向けの歌を書いて供える習わしがあり、昔は六日に梶の葉売りが街を歩いたものである。梶は製紙材料となるクワ科の落葉高木で一〇メートル近くになり、葉はハート形で先が尖り、水に浮く。

書了へて梶の葉におく小筆かな 山本京童

筆とりてしばらく梶の葉に対し 田畑美穂女

墨はじく梶の葉に筆なじまざる 神前あや子

梶の葉に向かひてしばし筆とらず 三澤久子

手をとつてかゝする梶の広葉かな 高浜虚子

ここには、「梶の葉」に対する現代人の代表的な見解が示されている。ただ、この「梶の葉」が、季語、さらには歌語として成立した事情については、「古来、七夕には七枚の梶の葉に、星に手向けの歌を書いて供える習わしがあり、昔は六日に梶の葉売りが街を歩いたものである。」と曖昧な表現に留まっている。「古来」や「昔」が何時を指すのかも分からない。しかしながら、歳時記は、現代人が俳句を詠む時の手引き書であるから、この簡略な説明で事足りるのであろう。

本稿では、この「梶の葉」がいかなる経緯で歌語として成立し、現代に至っているのかを王朝文学の流布と継承の一事例として、実証的に考察してみたい。

一、梶の葉について

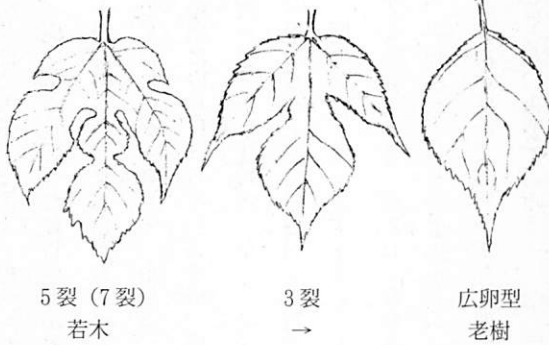
そもそも、本稿で対象とする「梶の葉」とはどういうものかを先ず論じたい。

『改訂増補 牧野新日本植物圖鑑』では、カジノキについて、次のように述べる。^(注2)

Broussonetia papyrifera (L.) Vent 落葉高木で、今では各地に普通に栽培されているが、元来は昔南方の暖地から伝わってきたものと思われる。しかし山口県の祝島には自生しているので問題になった。樹は直立して分枝し、高さは10、幹の径は60 cmで、新枝には粗毛が密生する。葉は有柄、互生、時には対生あるいは3輪生し、広卵形で先端は鋭尖形基部は円形、切形、あるいはやや心臟形、老樹の葉は基部がたて形であるが、若木ではそうならずしばしば3裂あるいは5裂する。葉のふちにはきょ歯があり、上面はざらつき裏面には葉柄ととも短毛が密生する。托葉は卵形で紫色をおび、早落する。春、淡緑色の花をつける。(中略) 枝の皮を製紙の原料とするため、この木を畠のふちなどに作り、株から出る枝を刈り、皮をはいで用いる。日本では従来この木に梶の字を用いているがこれは俗用である。〔日本名〕意味は不明。あるいはコウゾの古名カゾの転化かもしれない。(漢名) 楮、楮、穀。

これを生物学者中西弘樹氏撮影の写真と筆者による模式図とで示せ

梶の木の葉形の時間的変化の図



ば、次のようになる。

写真は、3裂から5裂の、比較的若木の梶の葉である。模式図では、一番左の図は、『改訂増補 牧野新日本植物圖鑑』にある解説の中の「葉は有柄、互生、時には対生あるいは3輪生し、広卵形で先端は鋭尖形基部は円形、切形、あるいはやや心臟形、老樹の葉は基部がたて形であるが、若木ではそうならずしばしば3裂あるいは5裂する。」における若木の場合であって、葉が5裂している。実際には、7裂していると見なすことも可能である。老樹になると、段々と葉が分かれずに右端のように、広卵形やハート形に為っていく。家紋として、使われる「梶の葉」は、多くの場合、5裂したものであるが、中には、7裂のものもある。七夕に使われた梶

の葉は、どういう形のものであったのか。

江戸時代の『拾遺都名所図会』（天明七年（一七八七））に見える「七夕梶葉流」の図では、笹竹に大きな5裂の梶の葉の絵が付けられている様子が見える。

随って、江戸時代頃、一般的に、梶の葉は5裂したものを標準的な形とみなしていたようである。先に、『大きな活字のホトトギス新歳時記（第三版）』で、「葉はハート形で先が尖り」としてあるのは、老樹としての梶の葉の姿であって、七夕で一般に使われた5裂した梶の葉ではないことになる。

『改訂増補 牧野新日本植物圖鑑』でも、老樹に見られる梶の葉が掲載されており、若木で5裂したものでないから、それが七夕にそのまま使われたと思われたら、少し問題があるろう。

それでは、なぜ5裂したものが、七夕に相応しい梶の葉なのか。実は、葉が裂けて独特な形をしていることが、七夕にとっては重要なことではなかったかと考える。梶の葉が七夕と深い関係を持つようになったのは、後に述べるように、万葉集の七夕歌で、彦星が漕ぐ船の「楫」が「梶」の漢字で表記されていたためであることは已に指摘が在るとおりである。^{（注3）}しかしながら、「楫」から「梶」が来ているのであれば、「梶の葉」でなくて、「梶の枝」でも良いはずなのに、なぜ「葉」が選ばれたのか。「楫」のイメージなら「枝」の方がむしろ相応しいのかも知れないのである。

次のように考えたい。先に述べたように、梶の葉は若木の時には、葉が3裂、5裂する。その5裂した葉は、独特の形故に、一度見たら忘れない

くらい印象的である。その上、船の「楫」に樹木の「梶」の字が当てられたのは、梶の葉の5裂した独特の形が船の「楫」と形が似ていて、それが、梶の木の語源になったとも言われているように、両者の形態的連想関係が大きいのではないかと考える。楫には、船をこぐ楫と、進む方向を定めるために船尾に取り付けられている楫（操舵）の両方があるが、どちらも、樹木の梶の葉と形が比較的に似ているのである。それで、それが、梶の枝でなく、梶の葉が七夕と結び付いた理由のひとつでないか。

なお、梶の葉は、墨で文字を書いても墨が流れたりせず、そのために選ばれたという説もある。確かに、経験上も、墨の定着が良いことは事実であるが、それはあくまで結果論であって、一義的には、「楫」と「梶」の音通、並びに、梶の葉の形態が楫と似ており、七夕に相応しい葉であるとされたことが、重要であろう。

二、散文作品における「梶の葉」

「梶の木」の文献上の最古の用例としては、次のものがある。

1. 出雲国風土記神門郡・飯石郡・仁多郡

凡て諸の山野に在らゆる草木は、……楫なり。

風土記のこの用例は、産物としての例であり、諸国の産物の実態を知りたいという中央政府の要求に応えたものである。まだ、舟の「楫」や「七夕」との関係は見いだせない。

2. 平家物語・巻第一・祇王

秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつつ、天のとわたる梶の葉に、思ふ事書く比なれや。

これは、隠棲した祇王一行のところに仏御前もやってくる場面であるが、伝統的な歌語である「天のとわたる梶の葉」を踏まえたもので、新味はない。七夕の日に梶の葉に思いを書くことは明記されている。

3. 吾妻鏡

治承四年九月十日己未。甲斐國の源氏、武田太郎信義、一條次郎忠頼已下は石橋合戦の事を聞き、武衛を尋ね奉らんと欲し、駿河國于參向す。而るに平氏の方人等信濃國に在りと云々。仍て先ず彼の國へ發向す。去る夜諏方上宮庵澤之邊于止宿す。深更に及び青女一人、一條次郎忠頼之陣于來り、申す可く事有りと稱す。忠頼怪み乍ら、火爐頭于招き之に謁す。女云はく、吾者當宮大祝篤光の妻也。夫之使ひと爲て參り來る。篤光申す。源家の御祈禱の爲、丹誠を抽んじ社頭に參籠し既に三ヶ日里亭に出不。爰に只今夢想にて、梶葉文の直垂を着て葦毛馬に韞す之勇士一騎、源氏の方人と稱し、西を指して鞭を揚げ畢。是、偏へに大明神之示し給ふ所也。何ぞ其の恃み無らん哉。覺る之後、參啓令む可しと雖も、社頭に侍る之間、差し進せ令むと云々。忠頼殊に信仰し、自ら求め出だし野劔一腰・腹巻一領を彼の妻に与ふ。

これは、諏訪神社の大祝篤光の妻が夫の使いとしてやってきて、諏訪明

神が源氏のみかたをするという知らせをもたらす場面である。

梶葉文は諏訪神社の社紋として登場しているのであって、七夕と直接の関係はない。

4. 謡曲「砧」

かの七夕の契りには、ひと夜ばかりの狩り衣、天の川波立ち隔て、逢ふ瀬櫓なき浮き舟の、梶の葉脆き露涙、ふたつの袖や萎るらん、水掛け草ならば、波打ち寄せよ泡沫。

大系本頭注では、「あの七夕星の契りは、一年に一度だけの仮そめのもので、すぐに天の川の川波に隔てられ、逢う甲斐もないつらい逢瀬なので、梶の葉をこぼれる露のように脆くも落ちる涙に、織女も牽牛も両袖を萎らせることであろう。」という訳を付けている。ここで、「梶の葉脆き露涙」とあるのは、確かに「梶の葉をこぼれる露のように脆くも落ちる涙に、」の意であるが、もう一つの意味として、「浮き舟の楫ではなく、(木の葉である) 梶の葉のように脆い」の意味もあろう。七夕に梶の葉が手向けられることと、「楫」と「梶」の掛詞、さらには、「梶の葉の脆さ」と「涙の脆さ」を掛けるという謡曲らしい、重層的な美しい詞章が綴られている。

5. 御伽草子〔中世小説〕「あめわかみこ」(東北大学附属図書館蔵)

七月七日になりぬれば、七夕のあふ日にもなりぬ。女はうたち、かちの葉とりてもちて、うたなんとかきて、とりとりにあそひ給へは、

若君、「我にもかちのはをまいらせよ。けふこそは便宜とおほゆる。

ちゝの御かたへ文まいらせん。」との給へは、人々申されけるは、「若君にもちゝのわたらせ給ふか。」と申せは、若君の給ふやう、「ちゝなくて人の子のむまるゝことやあるへし。きはめてめてたきちゝのましますそや。人々はしり給はす候や。」と仰有ければ、みなみな、ふしきに覚えて、かちのはたてまつりければ、「御すゝりきよめてまいらせよ。いものはの露とりて、すゝりの水に」との給ひて、御すゝりひきよせて、うちかたふき給ひて、一しゆの哥をそあそはしける。

天川いかにちぎれるなかなれは

としに一度あふせなる覽

とあそはして、七夕のけたひつとくいとにひきひかせて、ひきむすひてまいらせ給ふ。

ここでは、芋の葉に降りた露を水として、墨で梶の葉に歌を書き、糸に結んで吊すことが明確に描かれている。本作品は、室町時代から存するもので、当時の七夕の行事をかなり忠実に反映しているものと思われる。

以上、代表的な例を挙げた。紙幅の関係もあり、他は省略する。

「梶の葉」は、散文作品では、奈良時代には地方の物産として描かれているだけであるが、万葉集の七夕歌で彦星が舟に乗って天の川を渡るといふ描写があり、その舟の楫が「梶」と表記されたがために、平安時代には掛詞として、「梶の葉」も詠まれるようになった。その伝統を受け継いだ

描写が『平家物語』等に見出された。また、御伽草子「あめわかみこ」では、梶の葉に七夕の歌を書くことがすっかり定着した様子が窺える。そこで、次に、どういう過程を通して、万葉集の七夕歌から、王朝文学の歌語「梶の葉」が成立したのかを具体的にみてみたい。

三、万葉集の七夕歌から王朝文学の歌語「梶の葉」の成立へ

万葉集には、七夕歌が百三十三首ある。例えば、次のようなものである。

山上臣憶良の七夕の歌十一首

卷八・一五二〇 牽牛は織女と 天地の 別れし時ゆ いなむしろ
川に向き立ち 思ふそら 安からなくに 嘆くそら 安からなくに
青波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽きぬ かくのみや 息衝き
居らむ かくのみや 恋つつあらむ さ丹塗の 小舟もがも 玉纏
の 真權もがも 朝風にい掻き渡り 夕潮にい漕ぎ渡り ひさ
かたの 天の河原に 天飛ぶや 領巾片敷き 真玉手の 玉手さし
交へ あまた夜も 寝てしかも 秋にあらざとも

秋の雑歌 七夕

卷十・二〇二九 天の河槿の音聞ゆ彦星と織女と今夕逢ふらしも

二〇五二 このゆふべ降り来る雨は彦星の早漕ぐ船の櫂の散沫か

二〇八一 天の河槿橋わたせ織女のい渡らさむに槿橋わたせ

以上に挙げた七夕歌の特徴を列挙すれば、次のようである。

ア、万葉集では、百三十三首の七夕歌のほとんどの歌が彦星（男性側）が七夕つめ（女性側）に逢いに行く形に変わっている。よく言われるように、日本の通婚の制度が反映し、日本化しているとみられる。彦星は橋を渡るのではなく舟に乗って逢いに行く形に変わっている。天の川のような大きな河を渡るには、日本では、橋よりも舟の方が現実的だったのだろう。

ウ、その場合、彦星自体が漕ぐ場合と船頭が別にいる場合がある。月が船頭（二〇四三番）のこともある。七夕には、月は上弦の月で、舟形をしているからである。

エ、僅かだが、二〇八一番のように織女が橋を渡って逢いに行くという中国の伝統を踏まえたものもある。

オ、しかし、万葉集の歌では、中国の七夕伝説に見られる織女の神仙・仙女的イメージが消失している。

以上を踏まえて考察すると、万葉集は、中国の七夕伝説を踏まえた懐風藻との違いが際立っていることが明らかとなる。懐風藻という漢詩の世界では、全くといっていいほど中国の伝統に則って七夕の詩を創作していた。同時代の歌人が、万葉集では、日本化された七夕歌を創作したのはなぜか。婚姻制度の相違以上の大きな理由があるのではないか。一言で言えば、中国の漢詩に対する日本の和歌という対抗意識の故ではないかと考える。七夕歌について見れば、中国の七夕について、懐風藻に作詩したように非常に詳しい知識を持ち、その内容を熟知していたはずの人々が、万葉集では、

それを無視するかのようには、織女の渡河を詠まず、特に鵲の橋は一三三首の七夕歌の中に一例も詠んでいない。懐風藻六首の七夕詩に二例鵲の橋が出てくるのに、万葉集で鵲の橋を無視する態度は異常であろう。鵲と上弦の月(半月)の関係を知らなければ、万葉人が鵲の橋で天の河を渡ることなど不可能で無意味なことだと考えたとしてもおかしくはない。それほど、万葉集の歌は、現実的である。仙女である織女が鵲の橋を渡り牽牛に逢いに行くという中国的神仙的雰囲気は濃厚な七夕伝説を忌避し、彦星が舟を漕いで川向こうの妹(妻)に逢いにいくという日本の現実的日常生活の世界に作り替えてしまったのが、万葉集の七夕歌の世界であろう。そこには、中国の伝説を素材にはしても、日本の七夕の物語を新たに創造しようという意欲を見出すことが出来るのではないか。

なお、この点について、吳哲男氏は、次のように述べておられる。^(注4)

八世紀に成立した日本文学史は、はじめに『日本書紀』『懐風藻』のような中国文学的な発想があり、次いでそれによって失われたとみなされた共感(感情)の共同性を想像的に回復しようとしたところに『古事記』『万葉集』誕生のモチーフがあると考えるべきである。(四・五頁)……『懐風藻』を前提にして『万葉集』は成立しているのである。その逆でないことは『古事記』と『日本書紀』の関係と同様である。この問題は単なる文体の差異ということではなく、中国「帝国」から自立しようとする時に必然的に生じる古代的なナショナルリズムの感情的基盤はいかに留意されたかという問題と関連するのである。

(二二三頁)

『懐風藻』と『万葉集』の関係を簡潔に指摘されたものだが、言い得て妙である。

そうして形成された日本版の七夕伝説の代表が、今述べたような、彦星が船に乗って、織女(七夕つ女)に逢いに行く形式である。そうした歌の中の代表的なものが次の歌である。

万葉集・卷十・二〇二九 天の川 楫の音聞こゆ (梶音聞) 彦星と

織女と 今夜逢ふらしも

万葉集・卷十・二〇一五 我が背子に うら恋ひ居れば 天の川 夜舟漕
ぐなる 楫の音聞こゆ (梶音所聞)

これらの歌において、彦星が漕ぐ船の「楫」が「梶」の漢字表記で記されているために、「かぢ」の音の共通性から、植物の「梶の木」が連想され、さらに、第一節で述べた理由によって、梶の枝ではなく、5裂に分かれた梶の葉が連想され、「かぢ(楫・梶)」の掛詞を通して、歌語として成立したものと推測される。^(注5)

文献上、最古の用例は、為信集(九八七年前後)の「けさはとてふな
でをすらんひこぼしのかぢのはをこそわれはかしつれ」である。^(注7)

次いで、後拾遺和歌集(応徳三年(一〇八六))の「あまのがはとわた
るふねのかぢのはにおもふことをもかきつくるかな」が見られる。

これらは、彦星の舟の「楫」と、植物としての「梶の葉」を掛詞とする
ところから生まれた表現であることは、ほぼ間違いないものと思われる。

用例からすれば、彦星の舟の「楳」から独立し、純粹に植物としての「楳の葉」に限定されるのは、待賢門院堀河集「一一六〇年以前」の、

七月七日かちの葉にかく

二三 たなばたにものおもふことしかしたらばけふはこころもなぐさみなまし

二四 たなばたはあまのはごろもかさねてもうらみやすらんとしのへだてを

や、

出観集（一一六九年〜一一七五年）の「かちのはにあまつひこぼし思ふことかかばかかましあすのなげきを」であって、平安末期院政期になってからと推定されよう。^(注8)

四、「楳の葉」歌の分類

そこで、右の考察を踏まえて、和歌に於ける「楳の葉」の用例を、時代順に並べて、歌の本文、あるいは、題詞について、その技法・内容を調べて分類してみたい。新編国歌大観によって、「楳の葉」の歌「題詞のみを含む」を抽出し、時代順に並べると、次のようになる。「楳の葉」の部分は太字で示す。★印は、「楳の葉」の前に、「彦星の舟の楳」を意味する語句が存在するものである。

為信集（永延元年（九八七）前後）

七月七日のつとめて、あさがほにさを

して

（五九 あさがほのつゆうちはらひたなばたのけふのくれをばまちやわたらん）

同じ日、かちのはにかきてたてまつりし中に

★六〇 けさはとてふなでをすらんひこぼしのかちのはをこそわれはかしつれ

後拾遺和歌集第四（応徳三年（一〇八六）） 七月七日かちのはにかきつ

けはべりける 上総乳母

★二四二 あまのがはとわたるふねのかちのはにおもふことをもかきつくかな

金葉和歌集第三金葉初度本（太治元年（一一二四）） たなばたの心をよめる 一宮小弁

★二四五 たなばたのあまのとわたるかちのはにおもふ事こそかけどつきせね

待賢門院堀河集（永暦元年（一一六〇）以前） 七月七日かちの葉にかく

二三 たなばたにものおもふことしかしたらばけふはこころもなぐさみなまし

二四 たなばたはあまのはごろもかさねてもうらみやすらんとしのへだてを

出観集〔嘉應元年（一一六九）〕安元元年（一一七五） 織女

二九四 かちのはにあまつひこぼし思ふことかかばかかましあすのなげきを

林下集上〔養和元年（一一八一）頃〕 四季部 七夕

（九二）ひこぼしのつまむかへぶねころせよやせせのなみはこゑむせぶなり）

九三 かちのはにおなじ思ひをかきながらいくあきすぎぬあまのかはなみ

俊成五社百首〔文治六年（一一九〇）〕 七夕

★三三七 七夕のとわたる舟のかちの葉にいく秋かきつ露の玉づさ

玄玉和歌集第五〔建久二〜三年（一一九一〜二）頃〕 皇太后宮大夫俊成

★四一五 七夕のとわたる舟のかちの葉に幾秋かきつ露のたまづさ

粟田口別当入道集〔建仁元年（一一〇一頃）〕 七夕

六八 かちの葉にかくことのはやあまのがはわたせのふねにうきてそふらん

千五百番歌合〔建仁三年（一一〇三）〕 千百十番 左 顕昭

二二一八 かちの葉にやほよろづ代とかきおきてねがふねがひは君がまに

まに

右 雅経

（二二一九）君がへんよはひをさしておほぞらにむれたるたづのおのがこゑ（こゑ）

左右共におなじ程にや

新古今和歌集〔元久二年（一一〇五年）〕 第四 皇太后宮大夫俊成

★三二〇 たなばたのとわたる船のかちのはにいく秋かきつ露の玉づさ

定家八代集〔建保四年（一一二六）〕 卷第四 皇太后宮大夫俊成 新【新

古今集の意】

★二九七 織女のとわたる舟のかちのはにいく秋かきつ露の玉づさ

明日香井和歌集下〔承久元年（一一一九年）〕 六月の比より、女子中将

忠嗣朝臣室歳十三わづらふ事ありけるに、七月七日かちの葉にかきつけ

る 一五九八 としごとのたえぬたのみをちぎりにてこの瀬にもたてあまの川

なみ

建礼門院右京大夫集〔天福元年（一一三三年）〕 頃

三二二 おもふことかけどつきせぬかちの葉にけふにあひぬるゆゑをしら

ばや

拾遺愚草員外〔嘉禎三年（一二三七年）ごろ〕 乱風萩葉傷人夕、翻浪荷

花結子時

六四〇 めにたてぬかきねにまじるかちの葉も道行人の手にならず時

隣女集〔飛鳥井雅有 仁治二年（一二四二）〜正安三年（一二三〇）〕 卷二 かちの葉を
★四五五 あまの川あふせの舟のわたしもりはやいそぎとれけふのかちの葉

実材母集 〔西園寺実材の母、正治二年（一二〇〇）頃〜建長二年（一二二五〇）頃か〕

五〇（頃か）

夫木和歌抄〔延慶三年（一二三〇）ごろ〕 法橋顯昭

寄文七夕

一六八〇一 かちの葉にやほよろづよとかきつけてねがふねがひはきみがまにまに

七四八 いく秋か思ふころをかちの葉にかきながすらん露のたまづさ

為理集〔藤原為理？〜文保元年（一二二七）〕

七月七日、かちの葉に物かきあへるをみるにも

七夕梶

八二一 別れにしなみだの露のたまづさもなほかきあへずぬるる袖かな

一〇五 梶のはになにとかくらん七夕のころのうちにあらぬおもひを

親清五女集〔平清親五女、承久二年（一二三〇）頃〜一二七〇頃。？〕

一〇六 けふを待つころをとへばかちのはにわがおもふ事ぞまづかかれける

こしぢのあね身まかりて侍りしとしての七月七日、かちのはにものかき侍るとて

七夕 七夕 四六一 梶のはにただ一ふでをかきつけておほき心のうちをしらす

雅有集 寄七夕述懐 〔飛鳥井雅有 仁治二年（一二四二）〜正安三年（一二三〇）〕

七夕七十首〔藤原為理？〜文保元年（一二二七）〕 七夕梶

（一二三〇）

二三 けふをまつ心をとへばかちの葉に我が思ふことぞまづかかれける

五三 おもふことけふかきつくるかちのはにわが身のうさをまづうれへつる。

三八九 なみだこそまづかきあへねもろともにたむけし秋の露のたまづさ

三百六十首和歌〔延文年間（一二三五六）〕

★一九三 天の川と渡る船の梶の葉に思ふ事をもかきつくるかな

俊頼

★一九四 天川戸わたる舟のかちの葉にいく秋かきつ露の玉章

六華和歌集（貞治三年（一三六四）以降）第三 上総乳母

★五五七 あまの川とわたる船のかちの葉に思ふ事をもかきつくるかな

俊成

★五五八 あまの川とわたる船のかちの葉にいく秋かけつ露の玉づさ

題林愚抄（文安四年（一四四七）〜文明二年（一四七〇）に成立。）第八

俊成

★二九六 たなばたのとわたる舟のかちのにはいく秋かきつ露の玉づさ

第八 同（延文四内御会のこと）為重

三二三六 七夕の恋のみだれやかちのにはけふかく鳥のあとにみゆらん

草根集（文明五年（一四七三）序）七夕草

三三三九〇 かちの葉におきけるものをよしやさは水かけ草の露の玉づさ

亜槐集（飛鳥井雅親（応永二十三年（一四一六）〜延徳二年（一四九〇））

卷第五

五四七 梶の葉に露の玉づささきだててかきなすことも空にうくらん

松下集（正広、応永十九年（一四二二）〜明応二〜三年（一四九三か四））

右 七夕木

二六〇〇 秋の風さそはねば又あやにくに梶の葉おとすけふの諸人

拾塵集（大内 正弘、文安三年（一四四六）〜明応四年（一四九五））

卷第八

山里にこもりゐ侍りしころ、山家七夕といふことをよみ侍りしに

八三〇 かりてほす真柴にまじる梶の葉は手向に似たるしづが山里

春夢草（肖柏、嘉吉三年（一四四三）〜大永七年（一五二七））

中 永正十二年かちの葉の歌

一一四〇 天河せせにつもりし恋のふちしらずいかなる水の水上

一一四一 ほし合のいもせよいかに天の下思はぬ人もなき契かな

一一四二 天河舟出しつつも思ひやるいもが家ぢやはるけかるらん

一一四三 天河心のわたすたなはしもあやぶむかたにさぞなくなるしき

一一四四 色なきも心は見ゆやそきよき水かけ草の露のことは

一一四五 ひこぼしの袖のわかれをおもふよりあらぬ草ばのけさの白露

一一四六 七とせの秋の空より七十や三とせのけふの手向をぞせし

黄葉集（烏丸光弘、天正七年（一五七九）〜寛永十五年（一六三八））

秋部 七夕

七二八 けふといへば星のあふせにかちのはをとるこそ露の手向なりけれ

卷第四秋部 七夕即事

七四一 七夕の心をとりて梶の葉に露かきながす敷島のうた

卷第十雑之部

やまひにふして侍りける比、七月七日に

一五五七 いく葉とるかちのはに天川みそぎの後もけふみそぎする

林葉累塵集〔下河辺長流、寛文十年（一六七〇）刊〕

第六 西田巨（ママ）

四〇四 思ふことけふかきながすかちのはよ七夕つめのみふねともなれ

広沢輯藻〔望月長好、元和四年（一六一八）〕延宝九年（一六八一）

手向のため七首を読み侍りしに

三八八 玉づさにとるかちの葉ぞまばらなる梧はきのふの秋の初風

晚花集 〔下河辺長流、延宝九年（一六八一）〕、七夕

一八三 天河ゆふなみちどり梶の葉にわがふみたらんあとはそへなん

梶の葉〔祇園梶子、生没年不明〕宝永三年（一七〇六）

卷中 ある人のもとより逢ひがたき心の歌よみてつかはしける

六四 梶の葉にかきもつたへよほど速き又こん秋の一夜なりとも

その返し

六五 ちぎりあらばほしのたむけのかちの葉にかかれる露は秋やほさまし

卷中 ある人のもとより

七二 梶の葉にかきつくしてもたのむかなあはれ一夜を星にたぐへて

芳雲集〔武者小路実陰、寛文元年（一六六一）〕元文三年（一七三三）

七夕扇

一七二九 梶のはにあらぬ扇も思ふ事書きてや星の手向にはせん

うけらが花初編〔加藤千蔭、享和二年（一八〇二）〕

卷三 七夕催興

★五〇八 あまの河とわたる舟の梶のはにかきもつくさぬ千千のことは

亮々遺稿〔木下幸文『亮々遺稿』（文化五年（一八〇七）） 初秋風

四〇四 たなばたの心やいかにくらくらんかちのはわたる秋の初風

以上を表に纏めると、次のようになる。

計	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	室町	室町	室町	室町	室町	室町	室町	南北	南北	鎌倉	鎌倉	鎌倉	鎌倉	鎌倉	鎌倉	鎌倉	鎌倉	鎌倉	院政	院政	院政	院政	平安	平安	時代							
	一八〇七	一八〇二	一七三八	一七〇六	一六八一	一六八一	一六七〇	一六三八	一五二七	一四九五	一四九三	一四一六	一四七三	一四七〇	一三六四	一三五六	一三一七	一三一七	一三一〇	一三〇一	一二七〇	一二五〇	一二三七	一二三三	一二一九	一二一六	一二〇五	一一九一	一一九〇	一一八一	一一六九	一一六〇	一一二四	一〇八六	九八七	年代(西 暦、成立 年、ある いは、作者 の享年)			
	亮々遺稿	うけらが	芳雲集	梶の葉	晩花集	広沢輯藻	林葉累塵	黄葉集	春夢草	拾塵集	松下集	亜槐集	草根集	題林愚抄	六華集	三百六十	七夕七十	為理集	夫木集	隣女集	雅有集	親清五女	実材母集	拾遺愚草	建礼右京	明日香井	定家八代	新古今	千五百番	粟田口	玄玉	俊成五社	林下集	出観集	待賢堀河	金葉集	後拾遺集	為信集	歌集名 (略語)
12		○												○					○																		梶と楫の 掛詞		
11		○天の川												○天の川	○天川	○天の川											○七夕の	○七夕の		○七夕の	○七夕の					○七夕の	○天の川	(天の川・ 七夕の) 門渡る舟 の梶葉	
30		○	○	○			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	梶の葉に 書く	
11	○渡る			○手向	○供える	○取る	○取る		○手向	○落す		○置く							○取る																		○貸す	その他	

右を分類・分析し、表を基に判断すると、次のことが分かる。

比較的が多いのは、「とわたる舟のかぢのは」という掛詞を踏まえた詠歌である。これは上述したように、彦星が舟を楫で漕いで天の川を渡るという万葉集の発想に基づくものであり、特に、その「楫」が漢字で「楫」と表記されていたところから生まれた発想である。この場合、「かぢのは」は「楫の葉」でありながら、一方で、「舟の楫」でもあるという二重性を持つ。詳しく言えば、これには二系統がある。一つは、後拾遺和歌集の系統で、「天の川門渡る舟の楫（楫）の葉に」とあるもので、もう一つは、「七夕の門渡る舟の楫（楫）の葉に」とある系統である。もうひとつ、金葉和歌集の「七夕の天の門渡る舟の楫（楫）の葉に」という形式もあるが、これは普及せず、この一首で終わった。というより、この金葉集の表現が仲介役となって、俊成の「七夕の門渡る舟の楫（楫）の葉に」を生み出した可能性がある。「七夕の門渡る舟の楫（楫）の葉に」は、表では四首見られるが、実は、すべて藤原俊成の同一の歌であるので、これも実際は一首あるのみである。従って、「天の川門渡る舟の楫（楫）の葉に」の形が、やはり基本形と言えよう。平家物語・巻第一・祇王に「天のとわたる楫の葉に、思ふ事書く比」とあるのは、その意味で、この伝統を負っていると見えるであろう。また、表から分かるように、「天の川門渡る舟の楫（楫）の葉に」の形で、「楫」と「楫の葉」を掛詞にすることは、室町時代前半までは、かなり見られるが、室町時代後半からは、ほとんどなくなる。

「楫の葉」が「舟の楫」から独立するのは、上述の如く出観集あたりからである。出観集は覚性入道親王（一一二九〜一一六九）の家集である。

覚性入道親王の父は鳥羽天皇、母は待賢門院で、その待賢門院に仕えた女房の堀河あたりが、楫の葉を「天の河とわたる舟のかぢのは」という掛詞の発想から「楫の葉」を解放した立役者であると思われる。

また、藤原定家あたりから、楫の葉そのものを対象として詠む形式が増えてくる。

拾遺愚草員外 乱風荻葉傷人夕、翻浪荷花結子時

六四〇 めにたてめかきねにまじるかぢの葉も道行人の手にならず時

は、藤原定家の家集の歌であるが、この歌の楫の葉は、普段は目に留める人もいない楫の葉も、七夕の時だけは人々の注目の的になることを詠じたもので、歌として、新しさを感じるものがある。

夫木和歌抄 同【千五百番歌合の意】 法橋顕昭

一六八〇一 かぢの葉にやよろづよとかきつけてねがふねがひはきみがまにまに

ここでは、男女の契が七月七日の一晚だけでなく、永遠に続くことを願って楫の葉に願いを書くという趣旨で、「楫」のイメージは完全に払拭されている。永遠の契を楫の葉に托すと言った趣向の歌は、他にもかなり多い。為理集 七夕楫

一〇五 楫のはになにとかくらん七夕のころのうちにあらぬおもひを

一〇六 けふを待つところをとへばかぢのはにわがおもふ事ぞまづかかれける

楫の葉には、他人のことよりも、まず自分の想いを書くのだという趣旨の歌も多い。これも、楫の葉は、歌を書く手段に過ぎず、舟の楫のイメージ

ジはない。

表に見られるように、梶の葉に歌を書くと言ふこと自体は、時代を超えて普遍的に存在するが、梶の葉の描き方は鎌倉時代から自由度を帯び多様になってくる。

これらのことを総合して考えると、万葉集をもとに成立した七夕用語としての「梶の葉」は、当初、彦星の漕ぐ舟の楫との掛詞的要素から出発したが、院政期の覚性入道親王の頃から歌語として、「楫」のイメージから独立し、その後は、歌を詠む用紙や素材として自由に詠まれていくが、「とわたる舟のかぢのはに」の持つ力は大きかったので、全く消滅することなく、時代を超えて、舟の楫のイメージも伝えられて行ったということが言えよう。その一つの現れが、角盃に梶の葉を浮かべる趣向である。

粟田口別当入道集（一二〇一年頃） 七夕

六八 かぢの葉にかくことのはやあまのがはわたせのふねにうきてそふらん

これは、藤原惟方（一二二五〜没年未詳）の家集であるが、内容からすると、所謂角盃に梶の葉を浮かべている様子を詠んだものではないかと推測する。つまり、掛詞ではないが、「梶の葉」に「楫」の意味も含まれてることになる。

また、冒頭に掲げた『便船集』の「梶葉」の付合語に「と渡ル舟」が残された現象へと繋がる伝統の力の強さであろう。

五、年中行事等に見られる「梶の葉」について

梶の葉と七夕の関係については、『古事類苑』歳時部を見るだけで、次のような多くの例を見出す事が出来る。年代順に並べると、次のようになる。

1 『看聞日記』伏見宮貞成親王（後崇光院、文中元年（一三七二）〜康正二年（一四五八）、応永二十三年（一四二六）

應永廿三年七月七日、七夕爲御法樂草花人々被召集、仍早旦人々獻之、座敷聊被飭屏風立廻、本尊唐繪懸之、其前チガキ棚一脚立之、種々唐物共置之、花瓶盆等數十瓶置之、委細記別紙、花所進人々新御所、余、（○後崇光）綾小路三位重有朝臣、長資朝臣、大光明寺僧達、指月坊主、藏光菴、行藏菴、退藏菴、淨隱菴、即成院、光臺寺、玄忠、憚啓、有善、寶泉、北藏等獻之、廿六瓶出來、飭具足唐物等、寶泉悉進之、僧俗參拜見申、節供如例、廿四年七月七日、七夕梶葉法樂依服暇略之、草花殊更五六瓶立之、花面々所進令略、但光臺寺一兩瓶獻之、御節供廣時申沙汰爲下司役、自往古被定置、而近頃善理下司職雖知行、不致沙汰之間中絶畢、廣時下司被補之間、任往古之例令勲仕珍重也、

七夕に行われる法楽が、服喪のために省略されたという記事で、法楽の名称として「梶葉」が使われるほど、七夕と梶の葉の一体感が存在したと言ふことだろう。

2 『成氏年中行事』享徳三年（一四五四）成立（七月）（室町幕府七夕）

朔日御祝如例、同七日御素麴參、其外御祝如常、公方様御單物、御紋梶ノ葉也、

足利將軍が、七夕に梶の葉模様の入った一重を召されたのである。

3 『年中定例記』明応年間（一四九二〜一五〇一）頃（室町幕府乞巧奠）

七月七日、御對面已下同前、梶の七葉に御詠あそばされ候也、

室町幕府でも梶の葉七枚に歌を詠んだことが知られる。

4 『伊勢貞助雜記』永正十二年（一五一五）前後

七夕に梶の葉に御歌被遊候御事候哉、七夕の御會は面向に而御座候、梶の葉に御歌被遊候御事は、内々の御事候哉、梶葉七枚に御歌をあそばされ、やねへ後向れて打上られ候、何も内々に而の御事に而候、

ここでも、梶の葉七枚に七夕の歌を書いて、屋根の上に向けたことが記されている。

5 『年中恒例記』（永祿三年（一五六〇）前後）

七月七日、（○中略）梶葉に七夕の歌七首あそばさる、也、（○中略）寅時の水にて、御硯を御會所同朋あらひ申て、御硯水には、いもの葉の露を、そのま、葉にて包て、御硯水入の上に置申也、又御硯のふたをあほのけて、梶葉七枚、梶皮、そうめん等を入れて、梶葉に歌をあそばされて後、梶皮そうめんにて竹に付て、御やねへあげらる、也、

梶の葉七枚に、芋の葉の露で溶いた墨で歌を詠み、そうめんを梶の葉や梶皮で包んで、竹に付け、屋根に上げる行事が、室町時代には、かなり広範に普及していたことを示す記事と言える。

6 『御湯殿の上の日記』慶長三年（一五九八）

慶長三年七月七日、朝御さか月まいる、七夕の御うた御がくもん所にて、いつものごとくあそばし、御すゞりあらはれて、きぬにて長はしおかる、いつものごとく、かちのはにあそばしたる御うたに、さくべい（素餅）を入れて、とくせん（得選）にいださる、小御所の御やねにあぐるなり、朝

かれい新大すけ殿、新内侍どの、さへものすけ御まいり、こよひの御さか月三こんまいる、じゅごう御まゐりなし、女御よりうりまいる、御神事の御行ずいまる、

歌を詠んだ梶の葉で、素餅(そうめん)を包んで、女官である得選に渡し、得選が屋根に上げる。9に示す『後水尾院當時年中行事』の場合の梶の葉と全く同じ処置が成されていると判断される。

7 『貞徳文集』慶安二年(一六四九)成立。松永貞徳(下)

名物奈良素麩、道明寺糯送給候、則七夕用立可申候、殊梶葉被取別候、
〈○中略〉恐々謹言、

七月七日

水淵石見守

高槻駿河守殿

そうめんと梶の葉が七夕の必需品であったことが知られる。

8 『日次紀事』(七月)黒川道祐、延宝四年(一六七六)・貞享二年

(一六八五)序六日 穀葉(今日市中賣穀葉、明夜書詩歌、以所供二星也)〈

ここには、梶の葉売りの存在が描かれている。七夕の前日に、梶の葉を売

る商売が成り立つほど、七夕の時に梶の葉に歌や願い事を書く習慣が、江戸時代には、庶民階層にも広まっていたことを示す意味で貴重である。

9 『後水尾院當時年中行事』(上七月)後水尾天皇(文祿五年(一五九六)〔延宝八年(一六八〇)〕

七日、梶の葉に歌をか、しめ給ひて、二星に手向らる、御引なほしめして、御三間の御座に著御、御はいぜんの人、例のきぬをいできて御前に参る、かけ帯ばかりをかけて候ず、内侍ひとへ衣をきて、御すゝりをもて参る、其やう重硯の中のすゝり七ツをとり出し、ひろふたにすう、二とほりに並ぶ、上に三ツ、下に四ツ也、いもの葉に水をつ、みゆひて、ひろふたの上の方の御右の方角によせて、あたらしき筆を二管、墨一挺、硯の傍におく、梶の葉七枚を重ね、おなじ枝の皮七すち、そうめん七すち、素べい二ツを三方にすゑて御前におく、七ツの硯にいもの葉の中なる水をそ、がせたまひて墨すり、梶の葉一枚ツ、とりて、歌をか、せ給ふ、或は當座御製、或は古歌定やうなし、硯七面をかへて一首づ、かき終せ給ふ、(古歌ならば七首也、當座の御製ならば、同じ一首を七枚に書なり)はいぜんの人梶葉七枚を重ねて、素べい二つを中に入れておし巻、上下を折てかちの木皮七すち、素餅(○素餅恐々素麩誤)七すちをもて、十文字におし結びて出すなり、女官便宜の所やねに打あぐ、中なるものに心をかけて、からすなどのかけてゆくこと、毎度の事也、御硯は院女院親王女御等御座の時、次第にまゐらせらる、御ものし右京大夫などもて参る、(○中略)こよひ星の

和歌兼題にて各詠進す、講ぜらる、迄はなし、たゞとり重ねて置く、ばかり也、毎年一首懷紙也、和歌七首のくわいしあり、同御遊あり、勿論御所作堂上地下のがく人しこう、盤渉調七なり、但御遊は有無不定也、

ここには、宮中における梶の葉の扱いが詳しく描かれている。七夕にちなんで七枚の梶の葉に歌を詠む。中でも、古歌ならば七首也、當座の御製ならば、同じ一首を七枚に書なり、とあるのは、面白い。さすがに、當座に七首も自作の歌を詠むのは困難であつたと思われる。芋の葉に降りた露を集めて硯の水とするのも、右京大夫集などにも見える古い習慣である。また、歌を書いた梶の葉をそのまま吊すのではなく、素餅〔素餅〕〔素麵〕〔素麵〕とも「そうめん」の表記として混在していたので、過ちではない。「そうめん」のことである。を入れて巻いて、梶の木の皮やそうめんで結び、最終的には、屋根に上げるとあるのが興味深いところである。『東都名所図会』〔天保十四年（一八四三）〕や歌川広重の「名所江戸百景・市中繁栄七夕祭」〔安政三年（一八五六）〕から同五年（一八五八）〕及び葛飾北斎の「富嶽百景・七夕の不二」〔天保二年（一八三一）〕、天保四年（一八三三）頃〕の七夕図では、七夕の竹竿を屋上に高く立ててある様子が描かれているが、これも軒ではなく、屋根の上へ上げることに意味があつたと考へるべきであろう。一つは、天上世界の七夕二星によくみてもらおうという趣向であり、もう一つは、中国の古い七夕行事として、衣服を竿に立てかけ、虫干しすることが、形を変えて伝わっているのである。

そうめんと七夕の関係は、『年中行事秘抄（七月）』（鎌倉初期成立）に次

のようにあることが関連している。

七日御節供事（内膳司）昔高辛氏小子以七月七日死、其靈爲無一足鬼神、致瘧病、其存日常食麥餅、故當死日以麥餅祭靈、後人此日食麥餅、年中除瘧病之惱、後世流其○矣、

これは、高辛氏の子供が七月七日に亡くなり、祟りを成したので、子供が生前好んだ麥餅を七月七日に供えたところ、祟りが収まったという話になむものであろう。

麥餅（素餅）は、『和漢三才図会』（正徳二年（一七二二）序）は素麵と同じとし、『類聚名物考』（山岡浚明、宝暦五年（一七五五）頃起筆）は、別ものとしている。

なお、一条兼良（応永九年（一四〇二）〜文明十三年（一四八二））作と言われる『尺素往来』には

「穀（カチ）ノ葉之上ノ素餅（サクヘイ）者七夕（セキ）之風流（リウ）」〔下47オニ・三〕

とあり、七夕には穀葉（梶の葉）の上のった素餅が供されたことが知られる。この場合も、餅状のものか、そうめんか、明確ではない。

10 『雍州府志』〔貞享元年（一六八四）成立。黒川道祐〕

北野宮（○中略）七月六日出下所、在外陣之神寶於西間并幣殿及會所上曝之、其間宮司掃内外陣之煤塵、同七日曉、松梅院主人入内々陣、獻御手水、神寶中、松風硯宮上置穀葉供之、爲被詠七夕祭之歌也、

穀葉とあるのは、梶の葉のことで、やはり、その梶の葉に七夕の歌が詠まれたことが記されている。

11 『古今要覽稿』屋代 弘賢（宝曆八年（一七五八））天保十二年（一八四一）編（時令）

年中行事略式云、星の宮の神事は、筑前國大島の星の宮と云あり、北は彦星の宮、南は織女の宮、兩社の間の川を天の川と稱す、土人婚禮の望ありて、女を得んと欲する人は、川北の彦星の宮に祈る、七月朔日より七日の夜半に至り、近郷の男女群集して、晝夜の神事嚴重なり、川の中に二つの棚をかまへ、名香を燻、灯明をか、げ、瓜、果物、神酒等をそなへ、竿のはしに五色の糸をかけ、梶の葉に歌をかきてたむけ、琴笛等を列らね、たらひに水を湛へ、星の影をうつし、若男女の望ある者は、其名前を短冊にしるし、彦星の棚には男の短冊を置、織女の棚には女の短冊をつらね、七日の夜に必ず風ありて、彼短冊を川水に吹流す、若婚縁の神慮にかなふものは、男女の短冊、たらひの水にならび浮む、是を縁定の神事と號する也、
ここでも梶の葉に歌を書き、彦星・織姫に手向けたことが知られる。

12 『守貞漫稿』〈二十七〉〔喜田川守貞。天保八年（一八三七）〕

七月七日、今夜ヲ七夕ト云、（タナバタト訓ズ、五節ノ一也、○中略）

今世大坂ニテハ手跡ヲ習フ兒童ノミ、五色ノ短冊色紙等ニ、詩歌ヲ書キ、青笹ニ數々附レ之、寺屋ト號ル筆道家ニ持集リ、七夕ニ星ノ掛物ヲカケ、太鼓ナド打テ終日遊ブコト也、江戸ニテハ兒アル家モ、ナキ屋モ、貧富大小ノ差別ナク、毎戸必ラズ青竹ニ短冊色紙ヲ付テ、高ク屋上ニ建ルコト、大坂ノ四月八日ノ花ノ如シ、然モ種々ノ造リ物ヲ付ルモアリ、尤色紙短尺ハトモニ半紙ノ染紙也、如此江戸ニテ此コトノ盛ナル、及ビ雛祭ノ昌也、市中ノ婦女多ク大名ニ奉公セシ者ドモニテ、兎角ニ大名奥ノ眞似ヲナシ、女ニ係ル式ハ盛ナル也、故ニ男ノ式ハ行レズ、形バカリニテ女式ハ昌也、（○圖略）作り物、昔ハ家ニ自造シテ興トス、今ハホ、ツキ形、帳面ノ形、西瓜ヲ切りタル形、筆形等、又枕ノ引出シヨリ文ノ出タル形ナド賣ル、然レドモ稀ニ自作シテ、種々ノ形ヲ付スル者往々有レ之、作り物多クハ竹骨ヲ用ヒ、紙ヲ張ル、右圖ノ梶葉ク、リ猿瓢等ハ、紙ニテ切タルノミ、
此処には、紙を梶の葉の形に切り抜いたものも登場していたことが示されている。

13 『藻鹽竈』〈五〉〔天保十二年（一八四一）〕天保十三年（一八四二）

星祭

信濃路やすくなき竹の星祭 長霍

關東にて幼童の諺に、色の紙をたちて歌を書、笹につけて、七夕にさ、ぐる事あり、都邊は、楮（カチ）の葉桐の葉などに歌を書て、川へ流して星

の手向とす、

これによれば、関東では紙の短冊に歌を書いて捧げ、都では、梶の葉などに歌を書いて、かつ川に流すことが行われていたことが知られる。実際、『拾遺都名所図会』（秋里籬島 天明七年（一七八七）巻之二 平安城「七夕梶葉流」の図では、大きく描かれた梶の葉の絵が鴨川に流される場面が描かれている。これは、結局、鴨川を天の川に見立て、梶の葉を流すことで、鴨川（天の川）に梶（楫）を浮かべ、彦星と七夕つ女との出逢いがうまくいくことを願うという趣向であろう。今でも、七夕飾りを川に流す習慣が残っているのは、その名残であろう。

結論

1. 歌語「梶の葉」は、日本化された万葉集の七夕歌では、彦星が七夕つ女に逢いに行くことが話の中心になり、その際に、彦星が漕ぐ船の「楫（かじ）」を、漢字表記で「梶（かじ）」と書いたことから、その漢字「梶（かじ）」の訓と意味から、植物の「梶（かじ）」が連想されて生まれた。

2. その場合、梶の枝でなく、梶の葉が選ばれた理由は、梶の葉の独特な形が船の楫の形と似ていて、七夕をイメージさせたことが考えられる。

3. また、「梶」の語源が「楫」である可能性もあり、「楫の葉」の形と、「楫」の形が類似し、連想関係にあった可能性もある。

4. 最初は「船出をすらん 彦星の楫（梶）の葉」や「天の門わたる楫（梶）の葉」と、「梶」と「楫」の掛詞として使われ、やがて、掛詞を伴わなくても、独立して、使われるようになった。

5. 梶の葉を吊す場合と水に浮かべる場合がある。水に梶の葉を浮かべる行事では、「楫」の機能が活かされている。梶の葉を吊す場合は、葉の上下が問題となる。吊す場合は葉柄を上にして書かないと字が逆様に為ってしまう。水に浮かべる場合であれば、どちらに書いても問題はない。絵によって、どちらで書いているか分かる。また、絵師が誤って書いている場合もあろう。

6. 梶の葉に歌を書くのは男性だとしているものもある。しかし、右京大夫集のように、女性も書いているから、男性の独占物ではない。男性しか書かないという説があるのは、梶の葉の楫が、船の楫から来ており、まさに彦星という男性の所有物であることに由来しよう。

7. 王朝文学の新たな歌語として誕生した「梶の葉」は、中国文学への對抗としての万葉集の伝統を踏まえたものであった。

8. 中国には全くなく王朝文学の新たな表現として誕生した歌語「梶の葉」は、その後、七夕と不可欠な乞巧奠の儀式に取り入れられ、七夕に奉納する歌を表記する手段として重宝された。

9. さらに、梶の葉は、七夕の日に索麵（そうめん）を食し、疫病を防ぎ健康を増進する習慣と結びつき、索麵（そうめん）を包んで、屋根の上に置く儀式でも葉は包装用、梶の皮は紐の役割で使用された。

10. この梶の葉で歌を詠んだり索麵を包む役割は、最初宮中で興り、貴族

にも伝えられ、それが室町幕府や江戸幕府に取り入れられ、江戸では、幕府に奉公していた女房達が、江戸市中に伝えて、広く庶民の行事として、江戸時代に広範囲に広がり、さらに全国規模で拡大していく。一方、都の京都では、宮中に始まった七夕行事が貴族を通じ、さらにその使用人等を通じ京都市中に広まり、雅びな七夕行事が広まった。

11. 京都市中で行われた七夕に於ける梶の葉流しの行事は、「天の門わたる梶の葉」という発生的な意味に於ける「梶」と「楫」の掛詞を再現するような性格のものであり、鴨川を天の川に見立て、梶の葉を流すことで、彦星が船を楫で漕いで無事に七夕つ女に逢いに行けることを願い、併せて、自分たちの願いが七夕二星に届くことを祈願した行事と見なせるのである。

12. 七夕の行事として、二星を角盃の水の中に映し、梶の葉を中に浮かべて二星の出逢いを梶〔楫〕で援助するというも行われた。酒井抱一の七夕図（根津美術館所蔵）のように、梶の葉を浮かべているものがあるが、これもまさに、天の川に梶の葉（彦星の船の楫）が浮かび、七夕つ女に逢いに行く場面の再現であり、二星が無事に出逢い、自らの願いも叶うことを願ったものであることは確かで、絵画における七夕と梶の葉の結合を見いだせる。^(注9)

13. 室町時代には、足利將軍が梶の葉模様の単衣を召される記事があり、梶の葉が支配層では、七夕の象徴として定着していたことが窺える。

14. 江戸時代、梶の葉売りという商売が成立したのも、町人階級にとって、梶の葉が七夕に必要な存在になったことの象徴であり、七夕

用語「梶の葉」の王朝文学における成立と、その後の流布と継承の最終段階の姿を見出すことが出来るのである。

注

- (1) 『大きな活字のホトトギス新歳時記（第三版）』（稲畑汀子編、三省堂、二〇一〇（平成二十二年）年六月）
- (2) 牧野富太郎『改訂増補 牧野新日本植物園鑑』（北隆館 平成元年七月）
- (3) 本稿では、船の「楫」と梶の葉の「梶」を区別するために、前者は「楫」、後者は「梶」の漢字表記を使うことにする。
- (4) 拙稿「東北大学附属図書館蔵『あめわかみこ』の翻刻及び解題」（『長崎大学教育学部人文科学研究報告』 第三八号、平成元年三月）
- (5) 呉哲男氏『古代日本文学の制度論的研究』（おうふう、二〇〇三年二月）
- (6) なお、「梶の葉」の「梶（かぢ）」の語源が、船の「楫（かぢ）」と形が似ているからだという説がある。例えば、名言通や林聖臣『日本語源学』である。逆に、船の「楫（かぢ）」の語源を植物の「梶（かぢ）」に求めるものもある『桑家漢語抄』。いずれにしても、一つの可能性としては成り立ちうる見方であろう。その場合、語源としての適否はひとまず置くとしても、葉の形からも、船の「楫（かぢ）」と「梶の葉」の関係が生まれたことになろう。
- (7) 新編国歌大観の注において、増田繁夫氏は、次のように述べておられる。「この為信は、「こま（小馬）の君」と親しい間柄であることから、花山一条朝ごろの人と考えられる。当時「為信」の名の人が数人いて紛らわしいが、中納言藤原文範男の為信か、藤原弘親男で、従五位下筑後守に至った為信と考えられる。ただし、弘親男の為信よりは、文範男の為信とすべきであろう。この一家には歌人が多いし、本院侍従集を所持していたことが本書に見えるが、

この為信の弟の知光は本院侍従の子と推定される人で、関係が深い。この人は蔵人所雑色から蔵人となり、右少将、右馬助を経て、永延元年（九八七）正月に従四位下常陸介で出家した。紫式部の外祖父である。」従うべきと考ええる。

(8) 新編国歌大観の注において、黒川昌享氏は、「出観集（覚性法親王）。家集成立の時期は、内部徴証より法親王逝去の嘉応元年（一一六九）二月一日以後まもなくの頃——嘉応二年正月以降、安元元年（一一七五）一月以前の六年間——と推定される。」としている。

(9) なお、NHKの「視点・論点」ご存知ですか 北斎の西瓜図（二〇一〇年七月七日）で、学習院女子大学教授の今橋理子氏が、次のように述べられているのは、ほぼ納得がいく説明と考える。七夕用語「梶の葉」は、絵画の世界にも継承されたのである。

葛飾北斎晩年の作品「西瓜図」をご存知でしょうか？ ……この西瓜は、……、濃い緑の皮で、まるで漆器のように見えます。横割りにされた半身には一枚の和紙が被せられ、上には菜斬り包丁が一丁、絶妙なバランスで置かれています。……そこには、北斎が隠した巧妙な仕掛けが立ち現れます。……しかも半身である「西瓜」は、満々と水を張った盥の形と同じです。さらにその上に置かれた包丁の柄が、盥である西瓜から突き出ているのは、おそらくその「盥」が「角盥」であることの暗示でしょう。では包丁の刃と和紙は、何の意味でしょうか。——私はこれを「梶の葉」と解釈します。なぜなら梶は「和紙」の原料ですし、包丁の刃は、「梶の葉」に掛けた「鍛冶の刃」という、一種の洒落なのです。

（付記。本稿は、国文学研究資料館の基幹研究「王朝文学の流布と継承」における研究発表を基にしたものです。発表の後、研究会の多くの方から貴重なご意見を賜りましたことに対し、衷心の謝意を呈します。）